

学位論文要旨

対人関係に係わる言語表現の研究

— 地域差・年齢差等の解釈から —

本稿では対人関係に係わる語彙のうち「仲間外れ」と「仲間入れ」を表す言葉について文献調査と方言調査を行った。主な先行研究として永瀬(1994)の「仲間外れ」を表わす「キャンパスことば全国分布図」や、篠崎(1994)の「仲間に入れてもらうときのかけ声」の調査がある。しかし、地域や年齢層が偏る通信型のアンケート調査が多く被験者の均一性にやや欠ける面があるなどして、日本全域について時間軸に従った伝播の相を見ることができない。

調査の背景には、方言はマイナス評価語彙の方が圧倒的に多いとされるのを裏付けるように、「仲間外れ」を表わす言葉の方が「仲間に入れる」際の言葉より辞典等に多く採録されていたことが挙げられる。そのため、「仲間外れ」を表わす言葉は言語変化がはやいのではないかと考えられる。しかしながら、これまでに「仲間外れ」や「仲間入れ」を表わす方言の通信型のアンケート調査はあるが、地域別・年齢別に示した聞き取り調査は管見の限り見当たらなかった。

そこで、本稿では近年の方言研究は通信型のアンケート調査が主流となっている中、調査対象者、地域が偏らないよう対面式の聞き取り調査を行い、データが均一になるようにした。「仲間外れ」を表わす語彙であるハミゴ(はみ出した子)、ハブ(省くの省略)、ハネ(はねるの省略)を中心とし、日本社会の対人関係や地理的なもの、テレビ等を含む文化的背景などが伝播にどのように係わってくるのか、「仲間入れ」の語彙とともに調査、分析している。

本稿の構成は、全部で4章の構成となっている。第1章では『「仲間外れ」を表わす語と社会』と題し、集団の特性と、これまでに調査されている人間の性質に関わる性向語彙の特徴や、近年の新語と言われるものにどのような傾向が見られるのか分析した。第2章では、「仲間外れ」を表わす語彙の分布について、日本全国聞き取り調査を行い使用実態・伝播状況を調べた。第3章では、「仲間入れ」を表わす語彙分布について第2章と同様に調査した。第4章では、調査した項目について言語地図を年齢ごとに作成し、分析を行った。

まず、山口大学の大学生に配布型のアンケート調査を行った。その結果、同じ世代の若者であっても「仲間外れ」を表わす言葉に使用の差が見られた。兵庫県・岡山県・広島県、大分県ではハミゴ類が目立ち、広島県・山口県でハネ類、九州地方はハブ類の使用が多いという結果になった。次に、全国の聞き取り調査の結果に基づいて「仲間外れ」を表わす語彙の分布を明らかにした。調査地域に直接調査地に出向き、生え抜きの方言話者に聞き取り調査をすること、年代が偏らないことを心がけた。調査対象者地域は47都道府県であり、各地点・各世代とも最低10人ずつに調査を行った。年齢層を少年層(10歳代)・若年層(20・30歳代)・中年層(40・50歳代)・老年層(60歳代以上)に分けて対面式の聞き取り調査をした。

その結果、調査の中心となったハミゴは、大阪府や兵庫県の中年層が学生時代に使い始めたものが、四国地方や岡山県、広島県に伝播し、最も西は大分県の若年層・少年層まで広がっていることが明らかとなった。山口県や福岡県でほとんど使われていないことから、瀬戸内海航路や四国地方を伝って大分

県まで伝播していることが分かった。老年層の利用者はおらず、古い文献等にも見られず、西部方言域を中心に若い世代に広がっていることから、西に伝播していった近畿発の新方言であると確信する。

ハブは『現代用語の基礎知識』に若者語として1986年に初めて登場して以来、2008年度版にもいまだに若者語として掲載してある。しかし、一概に若者語と言えない理由に、静岡県 of 地域方言説が挙げられる。静岡県から発信されたハブは、本調査で神奈川県や東京都の40歳代が学生時代に使用し始め、東京を経由したことで全国へ伝播されたことが証明された。九州地方や北陸地方、東北地方の利用者が若年層・少年層に限られているため、同時期に一気に全国に広がったことが裏付けられた。

ハネはかつて辞典等の記述から西部方言域の地域方言として広く使われていたが、老年層ではすでに中国地方5県に縮小され、少年層になるとさらに使われなくなる傾向にあった。近い将来消滅する言葉の一つではないかと思われる。ハネが使われなくなっている背景には、ハミゴやハブが新しく中国地方で使われ始めたことが考えられる。岡山県は老年層から若年層までハネが中心であったのに対し、少年層ではハミゴが70%の使用率になるなど、急激に言葉が変化していく様子が見られた。

また、岐阜県や愛知県で使われているハバもハブの伝播によってその使用は少年層を中心に衰退傾向にあることが分かった。しかしながら、青森県のハゴや秋田県のハヅケ(ハズケ)のように今なお多くの若い世代に使われ続けている地域もあることから、新しい言葉をすぐに受け入れないという地域性があることが考えられる。青森県や秋田県同様に「仲間入れ」を表わす言葉も老年層から使用されているカデテという言い方が根強く若い世代にも聞かれた。

一部の地域を除き、多くの地域では「仲間外れ」を表わす言葉の変化がはやいことから、世代を超えて使用されるようになった言葉には、語感の「きつさ」が薄れるために、別の新しい言葉を求める傾向が強いことが分かった。

一方「仲間入れ」を表す言葉の場合、「仲間外れ」のような著しい言語変化は見られなかった。共通語としてのイレル類が全国的に使われていたが、地域によっていくつかのバリエーションが見られた。イレル類と同様に全国に広がったものにマゼル類が挙げられる。マゼテは老年層では、近畿地方と東部方言域で使われていたものが、若年層・少年層になると西部方言域や九州地方に勢力を広げていた。イレル類に次いで全国に広がったマゼル類は、今後方言という意識が薄れていくものと予想する。

地域性の強いものに、青森県、秋田県、福岡県、熊本県の「カテテ(カデテ)」が挙げられる。このカテル類はマゼルの意味で、古く『日本書紀』や『万葉集』に用例が見られる言葉である。古い言葉が、東北地方や九州地方の一部に方言として今も残っている様子が窺えた。また、仲間入れの際にヨセル類を使っている近畿地方や中国・四国地方の例をみても、老年層から少年層まで幅広く残っていることが分かった。それは「仲間入れ」の言葉は新しい言葉が伝播すると使わなくなるのではなく、方言形と共通語形を併用しているためだと考える。

このように、より刺激の強さを求める「仲間外れ」を表わす新語の吸収に比べ、「仲間入れ」は新しい言葉を必要としていないと考える。「仲間外れ」を表わす言葉については、江戸時代中期にあたりには始まる急激な語形改新が見られたが、「仲間入れ」を表わす言葉の場合、このような著しい変化は見られず、長い年月をかけてゆっくりと進む変化の波である。公の場で使用する言葉であるため、他人に聞かれて困るということはない。そのこともあって、従来から使用していた方言と新たに伝播してきた語とを併用している地域が多い傾向があることを指摘できた。

目次

序 問題の所在と研究視点	1
研究の目的	2
研究の意義	3
研究の方法	3
第1章 「仲間外れ」を表わす語とその社会	5
1・1 仲間外れと集団社会	5
1.1.1 子供の仲間集団における対人関係	6
1.1.2 方言と新語からみる対人関係	7
1.2 語源について	9
1.3 インターネット検索によって明らかとなる使用状況	10
1.3.1 ハミゴ類の使用実態	10
1.3.2 「ハミゴ」の「子」が表す概念と使用実態	11
1.3.3 インターネット上のヒット回数	11
1.3.4 ハブ類の使用実態	11
1.3.5 ハネ類の使用実態	12
1.4 第1章まとめ	13
第2章 対人関係に係わる「仲間外れ」を表わす語彙の分布	14
2.1 「仲間外れ」を表わす方言の先行研究	14
2.2 辞典・方言資料等における調査対象語の位置づけ	16
2.2.1 辞典等における記述	16
2.3 調査方法、調査対象者、調査時期	22
2.4 近畿地方の使用実態調査	22
小括	35
2.5 四国地方の使用実態調査	36
小括	43
2.6 中国地方の使用実態調査	44
小括	63
2.7 九州・沖縄地方の使用実態調査	63
小括	75
2.8 東海地方の使用実態調査	76
小括	79
2.9 信越・北陸地方の使用実態調査	79
小括	85
2.10 関東地方の使用実態調査	86
小括	96
2.11 北海道・東北地方の使用実態調査	97
小括	105

第2章まとめ	106
第3章 対人関係に係わる「仲間入れ」を表わす語彙の分布	107
3.1 「仲間入れ」に関する先行研究	107
3.2 辞典類・方言資料類における調査対象語	111
3.3 調査方法、調査対象者、調査時期	115
3.4 北海道・東北地方の使用実態調査	115
小括	120
3.5 関東地方の使用実態調査	120
小括	124
3.6 信越・北陸地方の使用実態調査	125
小括	127
3.7 東海地方の使用実態調査	127
小括	129
3.8 近畿地方の使用実態調査	129
小括	134
3.9 中国地方の使用実態調査	134
小括	139
3.10 四国地方の使用実態調査	139
小括	142
3.11 九州・沖縄地方の使用実態調査	143
小括	148
3.12 第3章まとめ	148
第4章「仲間外れ」と「仲間入れ」を表わす対人関係語彙の比較考察	150
4.1 聞き取り調査における「仲間外れ」を表わす語彙の伝播	150
4.1.1 「仲間外れ」を表わす語彙の使用状況(老年層)	151
4.1.2 「仲間外れ」を表わす語彙の使用状況(中年層)	153
4.1.3 「仲間外れ」を表わす語彙の使用状況(若年層)	155
4.1.4 「仲間外れ」を表わす語彙の使用状況(少年層)	157
4.2 聞き取り調査における「仲間入れ」を表わす語彙の伝播	158
4.2.1 「イレテ」の使用状況(老年層)	159
4.2.2 「仲間入れ」を表わす語彙の使用状況(老年層)	161
4.2.3 「仲間入れ」を表わす語彙の使用状況(中年層)	163
4.2.4 「仲間入れ」を表わす語彙の使用状況(若年層)	165
4.2.5 「仲間入れ」を表わす語彙の使用状況(少年層)	167
4.3 「仲間外れ」に関する調査対象語の使用開始年齢	169
4.3.1 使用し始めた年齢について	169
4.3.1.1 ハブ類が老年層から使用されている地域	169
4.3.1.2 ハブ類が中年層から使用されている地域	169

4.3.1.3	ハブ類が若年層から使用されている地域	170
4.3.1.4	ハミゴ類の中年層から使用されている地域	172
4.3.1.5	ハミゴ類が若年層から使用されている地域	172
4.3.1.6	ハネが老年層から使用されている地域	173
4.4	「仲間外れにする」と「ハミゴ」類等の言い方のきつき	173
4.5	調査対象語を使いはじめたきっかけ	174
4.6	「仲間外れ」を表わす調査対象語の使用例	175
4.6.1	新聞・雑誌等の用例	175
4.6.2	書籍における使用例	175
4.7	「仲間入れ」を表す語彙の使用例	179
4.7.1	新聞・雑誌等の用例	179
4.7.2	『クレヨンしんちゃん』における「仲間入れ」の用例	180
4.8	第4章まとめ	181
結論		186
補助資料1		190
補助資料2		192
補助資料3		193
参考文献・参考サイト		199
謝辞		202